

「令和」なピノキオ児童公園

—雪谷特別出張所管内公園巡り③—

この公園は、びっくり、入口に向かって赤い口を大きく広げ目をかっと見開き、怪我やいざこざに眼を光らせている大きなキョウリュウがいるのです。そのよき（好き→令）はたらきで、子供達の和気あいあいの笑顔が溢れています。その昔、雪谷の辻々に立てられ今も残るお地蔵さんのようなキョウリュウです。茶色で高さ1.8メートル、長さ1.2メートル、FRP製（洗足池ボートと同じ素材）です。

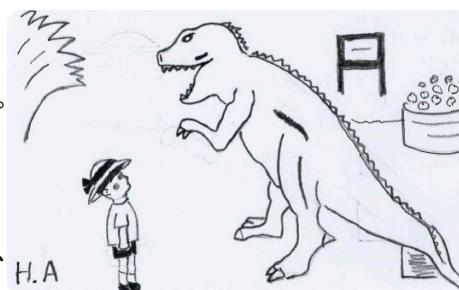
公園は、雪谷中学校正門前から呑川を渡りほんの少し歩くと左手にあります、東雪谷3丁目25番です。キョウリュウは公園が平成6年9月に開設された時のもので、時の恐竜ブームを反映したのでしょうか。二足で立ち上がる姿ですが四足歩行のイグアナドンを彷彿とさせます。

公園の広さは700m²で、中央には幼児でも安心の滑り台があります。滑り台は樹脂製の複合遊具の一部で、他にかなり背の高い雲梯、上にコイル状の丸棒、各面に○や×など3種の記号のあるピース9個を3つずつ串刺にし、回しながら並び替えを楽しむルービックキューブ様のものなど、合わせて4つの遊具が複合しています。

日当たりもよく静かな住宅に囲まれており、見通しもよく安全安心な児童公園です。

(東中・秋山一雄)

◇資料提供：調布地域基盤整備事務所公園管理担当
◇絵の提供：H. Aさん



俳句

輪踊りの闇裏返し
父になき八十路を生きむ盆の月
電柱の影失へたる炎暑かな

(東中・柿沼昌芳)

ポイントは一円なのに魅惑する
図書館の棚が導く好奇心
朝コーヒー今日も元気に薫り立つ

川柳

(東中・柿沼昌芳)

好きになった町、石川台

35年前、早朝野球の出会いからの始まりです。毎、日曜日9名寄り集まりの集団チーム、試合は全員レギュラー。野球好きな俺は皆勤賞だったかもしれない。チーム名「石川台青年会」だったと思うが思い出せない。残念なことに人の集まりが少くなり自然消滅になってしまった。チームメンバーの一員となり仲間が出来たことが、町を好きになった要因かも。

好きになった町の一コマの風景で、夏盆踊りの夜店の準備と、当日、焼きそば・ビール・金魚すくい・ゲーム等の手伝いをした。

秋には祭礼、町の会員多数の人が準備に参加し、大人神輿、子供神輿、山車飾りが終り、皆、安堵の顔。当日身出しを終えて、意気揚々に神酒所へと急ぐ。すでに担ぎ手の多数の熱気であふれ、祭りも仕切人の掛け声とともに、神輿が出発、神社・町内の渡御へ。

大きな声を張り上げ、ワッショイワッショイの掛け声も威勢よく町にもぎやかに。

好きになった町の一コマの風景をもっと、もっと見たく、もうちょっとお手伝い。
(石川台・N. H.)

マイ・タイムライン講習会開催のお知らせ ～私の逃げ方を考えよう～



雪谷特別出張所管内(平成31年4月1日現在)

世帯数/30,864世帯(対前年比 431世帯増) 総人口/62,388人
男/30,003人(対前年比185人増)・女/32,385人(対前年比503人増)
※外国人住民を含めた数にしております。



がくあじさい
絵画 笹丸・小久保 衡子

編集後記

平成2年(1990)新年号に創刊され、この「ふれあい雪谷」も令和元年7月発行のあさがお号で通巻115号を迎えました。この間、地域にお住まいの多くの方々から原稿の投稿をいただき、毎号発行されるのを楽しみにしているとの声が耳に入りますと編集会議にも力が入ります。

昨年12月23日、平成天皇は、「戦争のない平成に心からの安堵と、心に残ることとして、自然災害で被害に多くあったことに言葉を尽くせぬ悲しみを覚えます」と述べられておられました。

雪谷地区でも災害対策として、現在小池小学校前から呑川付近への下水配管工事が進められています。令和時代も安心・安全な雪谷地区であることを願って編集を続けてまいります。
(小池・原 龍興)

[編集委員]

笹丸・小久保 衡子／雪谷石川台・倉田 清子／南雪谷・河野 洋一郎／
東雪谷東中・秋山 一雄／池の台・柏 三八子／小池・原 龍興／上池上・船山 康夫

ふれあい雪谷(創刊・平成2年(1990)12月20日) 年4回発行
(1月・新年号／4月・さくら号／7月・あさがお号／10月・もみじ号／の1日発行)
[発行日] 令和元年(2019年) あさがお号 7月1日(通巻・第115号) 発行
[発行] 地域力推進雪谷地区委員会 [編集]「ふれあい雪谷」編集委員会
[連絡先] 雪谷特別出張所
〒145-0065 大田区東雪谷3-6-2 電話3729-5117 FAX3729-1826
http://www.city.ota.tokyo.jp/chofu/ts_yukigaya/index.html

入院体験

家の中で階段から落ちた。去年の10月28日のことである。落下する途中で壁に後頭部をぶつけ、首が強く折れ曲がった。私は救急車で病院に搬送された。手足にしびれなどの障害が出なかったことから、頸部の損傷はそれほど重大ではないと診断され、月に一度の通院で経過を見ることになった。ところが、月日がたつにつれ肩や腕がビリビリし始め、ついには激痛に悩まされるようになった。2月末に行われた何度目かの診察の結果、突然手術をすることになった。受傷から4ヶ月後の緊急入院である。落下時に頸椎が脱臼し、この間に進行して神経を圧迫し始めたことが判明したからである。大したことではないと思っていたのに、素人目には折れているとしか思えない自分の首のレントゲン写真を見せられて、えらくショックを受けた。

手術は、頸椎を前後から金具とボルトで固定するという、いかにも痛そうなものであったが、全身麻酔のおかげであつたという間に終わった。知らないうちに7時間が経っていた。手術後は集中治療室に1日置かれ、その後一般病棟へ移された。初めのうちは、看護師さんは特別に私に注意を払ってくれている様だった。彼女たちは昼夜を通してよく働き、忍耐強く、しかも優しかった。日を追うごとに体につながっていた管やコードの数が減り、それについて看護師さんの私に対する関心も減っていった。

やがて、病室に私より重篤な患者が運び込まれてくると、もっぱらそちらへ関心が集中し、私はついに血圧と体温を測ってもらえるだけの存在となってしまった。当初は3月末といわれていた退院も、順調な回復のおかげで22日に早まった。退院当日には、せめてその日いっぱいはベッドに居られると思っていたが、急患が入った場合にそなえ、いつでも待合室に移れるように荷物をまとめておけと通告された。もはや患者扱いではなかった。

手術によって治癒する見通しが立った今でこそ、このような入院体験も書けるが、受傷してから入院するまでの4ヶ月間は、首の骨が不気味な音を立て、本当にこれで残りの人生を過ごせるのだろうかと暗澹たる気持ちだった。いつも上り降りする家の中の階段でまさか落下するとは、ちょっと落下しただけでこんな災難に会うとは・・・。私と同じ高齢者の皆さん、災難は日々の生活の至るところで口を開けて待っています。

(南雪谷・河野洋一郎)

終戦後の自治会活動のあゆみ

昭和20年の終戦の頃、東雪谷の街は戦火に見舞われ半数近くの家が焼失してしまいました。

戦前の町会活動は国の施策の末端行政のひとつとして、隣組の活動を行いました。戦後は生活物資の配給等が活動のひとつになりました。そうした中で東雪谷文化会の責任者として国府方治代さんが就任され、防犯・衛生・消防等の身近な事業を行っていました。その後大田区赤十字奉仕団（現在の自治会）として東雪谷の事業を引き継ぎ赤十字募金運動や災害時の救護活動、街灯の増設・保守等、街の復興に婦人部を中心に活動していました。

この頃当自治会は70坪程の借地（現東中公園）と、30坪程の事務所を所有していましたが、当町会も廃止となり、財政的にも苦慮し復興ままならない時期になっていました。この対策のため、国府方治代さんならびに財産整理委員の方々の協議により、広く住民の利便を考慮し町会の跡地を大田区の出張所として利用することが望ましいとの結論に至り昭和23年に大田区に寄付することにしました。寄付にあたり、赤十字奉仕団がその会合に使用するときは公務に支障のない限り利用出来る事となりました。寄付された事務所は調布支所第5出張所として使われました。

東雪自治会ではその後活動範囲が拡がり、現在では部の数は防災を含め、10の部と、150人を超える役員数、住民は3,200世帯7,200人と区内でも大きな規模の自治会に当たります。自治会としての夢は自治会の会館を復活させたいと頑張っています。

(東雪・永久保孝治)

開催されました！！

第68回大田区子どもガーデンパーティー

4月28日、大田区子どもガーデンパーティーが開催されました。洗足池会場では「平成最後の大パーティー」のテーマで開催され、4,932名の方々が参加されました。はねぴょんも登場し、子どもたちに大人気でした。



平成二十四年秋、江戸城の名によりを残す桔梗門の橋を渡り、初めて皇居勤労奉仕に団長の友人と共に参加しました。広い皇居内は、然豊かな昭和の森が残っていて、思わず懐しさに心が和みました。
両陛下が大切にされている全国の奉仕団とのひと時、作業の手を休めて、御会釈を待つ緊張感―。一瞬時が止ったかのような空気感の中で、各地から集まつた団長の一人一人にお声を掛ける天皇陛下の独特的のトーン、皇后様の陛下への所作の一挙手一投足は、今も瞼に焼きついています。

この度の御譲位による生前退位は二百二年振りのこと、今回十連休のおかげでテレビの画面を通して皇統の歴史と御代替りの儀式のこと、そして戦後象徴としての天皇像の御体現、自國についての歴史の学びを深めることができたのは幸いでした。

御在位三十年、式典のことばは深くこの国を全身全霊を持って牽引してこられたからこそ「ご立派な内容で、漠とした憲法の一文が、見事に甦えったのは、天皇自らの歩まれた歳月の証だったからではなかつたかと思いました。宮中での最後のおことばが終り、去り行く陛下の靴音、毅然として振り返つた扉の前で、いつになく威厳に充ちたお姿には、思わず胸が熱くなりました。

三十年にわたる両陛下の旅路に、国民の一人として、心からの謝恩を捧げたく思いました。そして令和の天皇の新たなる門出を祝福したいと思っています。

「二度目の四国めぐり」

私が初めて四国に渡ったのは大学一年の夏休みでした。徳島県の友人に阿波踊りを見に来ませんか?というお誘いを受けて学友三人で徳島に向かい、私は徳島迄来たからには四国を色々訪れるのも良いと考え、祖谷渓、大歩危、小歩危、高知城、足摺岬などを回りました。足摺岬には金剛福寺があり、当時は店や宿もなく静かな所でした。その夜は金剛福寺に泊めてもらい、夕食は初体験の精進料理でした。翌日は乗り合いバスで宇和島へ向かいました。バスはとても混雑しておりました。列車で松山に行き、松山城を見学し道後温泉で一風呂浴びて休憩し、松山港から船で吳港に向かい、学友が迎えてくれ、大変お世話になりました。

広島では原爆ドーム、資料館など見学し、厳島神社を参拝しました。友人宅で泊めてもらった時、初めて敷布団の上にゴザを引いてもらい、気持ちがよかったです。東京に帰ってからゴザを求め、やみつきになりました。友人宅から京都に向かい二日間京都を回りました。日本人が「テンプル（寺）、テンプル（寺）」と言っていたことが耳に残っています。こうして私の大学一年の夏休みは終わりました。

あの大学一年の阿波踊りから60年が流れ、今年平成31年2月22日より四国八十八か所のお遍路巡りをしました。車で10日間、2,300キロメートル走りました。お遍路宿には色々な人がおり、体格のよい白人が大きなリュックを背負い、黙々と一人遍路をしていました。外人は少しくらいの言葉が分からなくても少しも躊躇しません。スマホや英語のガイドブックがあるのです。30歳位の女性一人旅の人出会い、ホテルの食事の時、お互いに目が合って会釈をしました。他には5、6人のグループ旅が多く、日本人のお遍路旅はバスツアーが多かったです。日本女性の一人旅は見かけませんでした。

今日は平成5年に亡くなった妻、信子と一緒に回る同行二人旅。お陰様で天候にも恵まれ、事故にも遭わず、今年80歳になるよき記念旅でした。

(東雪・高野英毅)

